

匿名コミュニティにおける対人認知 Interpersonal Cognition in Anonymous Community

畦地真太郎*¹ 松村憲一*²
AZECHI, Shintaro MATSUMURA, Ken'ichi

*¹北海道東海大学国際文化学部
School of International Cultural Relations, Hokkaido Tokai University

*²独立行政法人通信総合研究所西田結集型特別グループ
Synsophy Project, CRL, Japan

A social psychological research indicates how people in anonymous community percept numbers of other group members. First, people in anonymous community tends to consistently recognize that the numbers of the members is fewer than the numbers of the statements in the discussion. Second, people think there are much members who have same attitude with their own more than who have the different one. We discuss these findings from the view ponint of social cognition and propose how do we solve the problems caused by the 'outgroup bias'.

1. 背景

インターネット上の匿名コミュニティとして代表的な“2ちゃんねる*¹”は、現在1日に1600万ヒットを記録されると言われている。その匿名性から誹謗中傷や犯罪予告などの問題も起こっているが、多くの人がこのコミュニティに魅力を感じているのは確かである。

畦地は、匿名コミュニティにおける議論が知識創造に有利であると述べた [1]。実世界においては、話者が互いの関係性や社会的地位に配慮した発言を行うために、自由な議論が阻害される。議論を行う集団の特性によっては、社会的地位が下の者が上の者の発言に対して反論を行うことは困難となり、有効な情報の提示が妨げられる。あるいは、良好な集団内の雰囲気（関係性）を壊したくないために、ある意見に対する反論や追加情報の提示が阻害される。これらの原因により、集団的浅慮などの問題のある集団意思決定が引き起こされると考えられている。一方、インターネット上での匿名コミュニティでは、互いの社会的な特性情報が隠される。話者は、互いの社会的地位や関係性を気にすることなく、発言することが可能である。平準な立場での議論が可能になることにより、話者が持っている情報を全て提示することができ、知識創造が促進されると考えられる。例えば、Public Opinion Channel [2] は、この議論に基づき設計された、匿名での議論を支援するためのツールである。

反面、匿名コミュニティでは、匿名性を原因とした様々な問題が発生すると考えられる。例えば、風説の流布や誹謗中傷などは、匿名性により個人の行為に対する責任が欠如した結果、生ずると考えられる。

匿名コミュニティにおける、もう一つの問題は、コミュニティの成員が意見分布を正しく認知できないということである。例えば、人は自分と同じ意見の持ち主が社会全体に実際よりも多く存在すると認知する傾向があるということが知られている。この“誤った合意性認知 (False Consensus Effect)” [3] に近い現象が、匿名コミュニティに参加する成員にも生ずると考えられる。人は、ある手がかり（例えば性別や人種など）について自分と同じ特徴を持つ人たち

連絡先: 畦地真太郎 〒005-8601 札幌市南区南沢 5-1-1-1 北海道東海大学国際文化学部 011-571-5112 (467) az@pvq.jp
*1 <http://www.2ch.net/>

「内集団」に対する認知と、異なる特徴を持つ人たち「外集団」に対する認知が異なる傾向を持つということが知られている [4]。特に、内集団成員に対しては「多様で様々な見解を持った人々」と認知する傾向があるのに対し、外集団成員に対しては「均一な人々」と認知しがちである。

匿名コミュニティ上では、内・外集団に対する認知の差が強調されると考えられる。匿名コミュニティにおける議論では、誰がどの意見を発言したかを知られることなしに何度も発言を行うことが可能であるため、ある人物が自分の意見を強調し、何度も同じ発言を繰り返す“自作自演”が可能である。成員は、外集団成員（自分と意見が異なる者）は均一な傾向を持ち、内集団成員（自分と意見が同じ者）は多様であると考えられるため、自分と異なる発言については、同じ者が似たような（自分と異なる）意見を何度も繰り返し書き込んでいる（自作自演）とみなしやすと考えられる。一方、内集団成員は多様であると認知しがちであるため、同じような意見についても違う人間が発言していると考えられる。これにより、匿名コミュニティの参加者は他の参加者について、自分と同じ意見の持ち主の数を実際よりも多く、自分と反対の意見の持ち主を実際より少なく認知すると考えられる。

以上に述べた認知の歪みによって、成員は匿名コミュニティ内の意見分布を正確に認知できないと考えられる。この認知の歪みは、匿名コミュニティにおける議論の非効率を生じさせると考えられる。なぜなら、成員が自分と反対する意見の分布を過小評価するあまり、自分の意見が多数派に属していると思込み、対立する意見を無視することになる。これでは、いくら成員の持つ情報がコミュニティ内に提示されても、それが有効に使われないという結果を引き起こす。匿名コミュニティにおける成員による意見分布の認知の歪みをコントロールしなければ、効果的な知識創造はできないと考えられる。

匿名コミュニティにおける成員の認知の歪みをコントロールするために、その現象がどのようなものであるかを明らかにしなければならない。以上の問題を解決するために、心理学的な実験を行った。

2. 方法

実験計画法に基づいて要因配置した質問紙調査を行った。被験者は、大学生 83 名である。被験者は、捕鯨への賛否を議論する匿名コミュニティのログを模した 18 発言を通読する。その後、被験者は「捕鯨に賛成している発言者と反対している発言者の割合は何対何か」という質問に回答を求められた。

実験条件は、質問紙の種類 2 水準（「賛成条件」「反対条件」）× 被験者の捕鯨に対する態度 2 水準（「賛成」「反対」）の、 2×2 要因配置である。

捕鯨への賛否の発言の割合は、質問紙によって異なる。1) 「賛成条件」では、ログの内、捕鯨に賛成する発言が 12、反対する発言が 6 である 2) 「反対条件」では、賛成が 6 発言、反対が 12 発言となっている。被験者の半数には「賛成条件」の質問紙を配布し、残りの半数には「反対条件」を配布し、実験操作を行った。

被験者は、ログを読む前に、捕鯨に対する態度を質問された。「捕鯨に賛成」「どちらかといえば賛成」と答えた被験者を「賛成群」、捕鯨に反対」「どちらかといえば反対」と答えた被験者を「反対群」とした。

3. 結果

被験者の「自分と意見の一致している人間と反対意見を持つ人間の分布」に対する認知の歪みを測定するために、被験者ごとに指数 IN を算出した（数式 1）。

$$IN = \frac{\text{賛成している発言者}}{\text{賛成している発言者} + \text{反対している発言者}} \quad (1)$$

IN は被験者が「捕鯨に賛成している発言者と反対している発言者の割合は何対何か」という質問に対して回答した割合の数字（3:2 や 15:3 など）から、被験者が推測した「捕鯨に賛成している人数の割合」を百分率によって表したものである結果は、表 1 に示すとおりである。

表 1: 結果（数値は IN, 括弧内は被験者数）

質問紙の種類	被験者の捕鯨への態度	
	賛成群	反対群
賛成条件	.64 (17)	.56 (24)
反対条件	.40 (16)	.37 (22)

分散分析を行った結果、被験者の捕鯨への態度による主効果が見られた ($F = 3.96, p = .050$)。さらに質問紙の種類による主効果が見られた ($F = 50.26, p < .00$)。被験者の態度と質問紙の種類による交互効果は見られなかった。

4. 議論

質問紙の種類による主効果が見られたことは、実験の操作が適切に行われたことを意味する。

被験者の態度による主効果は「捕鯨に賛成する人は、捕鯨に賛成する他の参加者の割合を、捕鯨に反対する人に比べて多く見積もった」ということを示している。この傾向は、質問紙の条件（賛成意見が多い、対、反対意見が多い）にかかわらず一貫している。

この結果は、匿名コミュニティにおける議論を読んだ被験者が、自分と同じ意見の持ち主の数を多く（反対の意見の持ち主を少なく）認知しているということを示している。残念ながら、この結果が一般的な誤った合意性の認知に基づくものなのか、匿名コミュニティに特有の現象なのかを確認することはできなかった。だが、匿名コミュニティでの議論の参加者が、自分の意見を確証する形で、コミュニティ内の意見分布を歪めて認知しているということが実証された。

匿名コミュニティにおける成員の認知の歪みをコントロールするためにはどうすればよいのか。一つの考えられる方法は、匿名コミュニティを仲介する（BBS や POC などの）システムに、コミュニティ内の意見の実際の分布を示す機能を実装することである。例えば、発言時に投稿者を識別する隠された ID を付加し集計することによって、投稿数に対する実際の発言者数がどれだけかを示すことが可能だろう。あるいは、発言に対する賛成・反対を投票するシステムの実装も、匿名コミュニティ内の意見分布の表示に有効と考えられる。これらのシステムにより、コミュニティ内の意見分布をリアルタイムに知らせ、成員の認知の歪みを取り除くことが、有効な議論の促進に効果的であると考えられる。

今後の研究では、誤った合意性の認知の効果を分離し、匿名コミュニティ特有の効果を精査する。今回の実験と同様の要因計画を持った追試を行い、データを比較する予定である。測定されたデータの一部は、研究会当日に発表する予定である。

参考文献

- [1] Azechi, S., Social Psychological Approach to Knowledge-creating Community, In: Nishida, T. (ed.): Dynamic Knowledge Interaction, CRC Press (2000) 15–57.
- [2] Fukuhara, T., Matsumura, K., Azechi, S., Fujihara, N., Terada, K., Yamashita, K., and Nishida, T., Creating city community consanguinity: use of public opinion channel in Digital Cities, In Tanabe, M., van den Besselarr, P., and Ishida, T. (eds): Digital Cities II: Computational and Sociological Approaches (in press).
- [3] Ross, L., Greene, D., and House, P., The ‘false consensus effect’: An egocentric bias in social perception and attribution processes, *Journal of Experimental Social Psychology* **13** (1977) 279–301.
- [4] Linville, P. W., The complexity extremity effect and age-based stereotyping, *Journal of Personality and Social Psychology* **42** (1982) 192–211.